

世界に羽ばたく理系人材育成を

KSC8高校と高大連携・接続で協定書

熊本県内のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定の県立高校を中心とした8校でつくる熊本サイエンスコンソーシアム

（KSC）と本学は16日（金）、理数教育の発展と優秀な人材育成のため、高大連携・高大接続に関する協定を結びました。本学50周年記念館で調印式があり、竹屋元裕学長と光永幸生KSC会長（第二高校長）が協定書を交わしました。

同協定によると、高校生の探究活動を本学の教員が研究支援するほか、大学が開講する講義等への高校生の参加が可能になります。今後、本学の協力教員と生徒たちの研究内容をすり合わせ、支援を行っていきます。また、高校と大学が連携し、生徒の成長を追跡評価する高大接続研究などにも取り組む予定です。

協定締結を記念する特別講演もあり、北里柴三郎博士のひ孫で、北里柴三郎記念館長も務める北里英郎氏（北里大学名誉教授、医学博士）が「柴三郎の人となり」と題して講演しました。（NL編集班）



協定書を手にする竹屋学長（左）と光永KSC会長



「柴三郎の人となり」と題して記念講演をする北里英郎氏

式典後、記念撮影する関係者と生徒たち



キックオフイベントで研究内容を発表する高校生のグループ



放射線治療、柑橘類使った化粧品開発、漢方薬…

この日は、キックオフイベントとしてSSHの5校が研究内容と進捗状況を発表しました。

鹿本高は「日本の放射線治療の現状」と題して、欧米に比べて比率が低いがん患者への放射線治療の現状を紹介しました。天草高のグループは特産の柑橘類を使った

5校が研究発表

化粧品を開発中です。宇土高は昼休み後に全校挙げて取り組む午睡に際して、有効な音楽を探求しています。

熊本北高は腎臓のモデルを作り「選択的透過性」について研究中。さらに第二高はニキビへの効果検証をきっかけに興味を抱いた漢方医学について発表しました。

将来のトップアスリート発掘

小中学生にフィットネスチェック

健康・スポーツ教育研究センター（RCHSS）は10日（土）、本学アリーナなどで、優れた運動能力を持つ小中学生を対象とした「ハイパフォーマンス・フィットネスチェック」を実施しました。

この取り組みは、熊本県教育委員会と熊本県スポーツ協会が展開している「くまもとワールドアスリート事業・タレント発掘・育成プログラム」の一環です。昨年度、小学校（4～6年生）で実施したスポーツテスト結果の上位者から選抜された22人のタレント育成指定選手（小学5年生～中学1年生）が参加しました。

会場では、RCHSS教員と理学療法学専攻の学生計22人のスタッフが、スプリント力、敏しょう性、反応力、投げる力、ジャンプ力、バランス、メンタルの7項目を測定。終了後の個別フィードバックでは、RCHSS教員が結果シートを提示しながら個々の選手のストロングポイント（強み）を同世代のトップアスリートのデータと比較しながら丁寧に説明し

ていました。

ハイパフォーマンス・フィットネスチェックとは、国立スポーツ科学センター（JISS）で行われるフィットネスチェックです。今回は、ジュニアやシニアの日本代表選手等に準じた検査項目を測定し分析を行いました。また、この日はスポーツ栄養士の松葉絵美先生を講師に招いての「スポーツ栄養セミナー」も開催されました。（RCHSS 益満美寿）



ジュニア選手
メデイシンボール投げに挑む

第49回理学療法士・作業療法士・言語聴覚士養成施設教員等講習会に参加して

幅広い学びの3週間 貴重な情報交換の場に

言語聴覚学専攻 児玉成博准教授



発熱を押しての受講 温かい対応に感謝

理学療法学専攻 田中貴士講師

8月15日から9月3日までの3週間、第49回理学療法士・作業療法士・言語聴覚士養成施設教員等講習会に参加しました。本来であれば東京や大阪の会場にて講習会を受講する予定でしたが、COVID-19の影響もあり、昨年引き続きZoomでの開催となりました。

講習会では、教育論や教育心理学など教育に関わる基礎分野から、能動的学習を促すアクティブラーニングの方法まで幅広く学ばせていただきました。

講習会の講義形式は講師による解説とグループディスカッションが半々ぐらいであり、他県の教員や臨床現場の先生と話す機会が多く、他の大学や専門学校の様々な取り組みについて情報交換することができました。大変貴重な3週間でした。

「理学療法士・作業療法士・言語聴覚士養成施設教員等講習会」が8～9月にかけてオンラインで実施されました。3週間にわたった講習会の模様を本学リハビリテーション学科から参加した教員2人に報告してもらいました。

8月15日から3週間、リハビリ養成校教員の講習会がWebにて開催されました。全国の理学療法・作業療法・言語聴覚士の教育に携わっておられる先生方155人が参加され、毎日8時間、講義とグループワークが行われました。

グループは流動的なため、多くの先生と交流し、多様な意見を拝聴・議論できたことは、私の財産となりました。本講習会は、大変貴重な学習機会になっただけでなく、私自身の新型コロナウイルス感染との戦いでもありました。発熱が続く中での受講は過酷な経験でしたが、同じグループの先生方から頂いた温かい対応は、医療人としての教育へ反映していきたいと思えます。

受講に際して日程調整などの配慮を頂いた先生方にも感謝申し上げます。

◆ポストコロナの学生支援策探る 第50回九州地区学生指導研究集会が8日（木）、オンラインで開催されました。毎年1回、九州地区の大学等の学生支援担当教職員を対象に開かれており、本学が当番校となった今回は約130人が参加しました。「ウィズコロナ・ポストコロナ時代の学生支援」をテーマに、午前は講演会、午後は分科会が行われ、参加者からは「他校と様々な情報を共有できて大変有意義な会となった」との感想が聞かれました。集会の進行は渡辺雄一学部長が務め、竹屋元裕学長にご挨拶をいただくなど、多く

の教職員の方にご支援をいただき、無事に終了することができました。（学務課）



講師
基調講演をする岩村純子

インフォメーション

週間行事予定（9月23日～9月30日）

9 / 26（月）	9月卒業式
-----------	-------

◆日本の抗毒素製剤の必要性を論じる会 10月21日（金）10～18時、本学1300講義室L。オンライン（Zoom）とのハイブリッド形式で開催。本学と化血研による生物・抗毒素共同研究講座主催。同講座の高橋元秀教授が司会を務め、厚生労働省、国立感染症研究所、聖路加国際病院、KMバイオリジクスなど、行政、研究・医

療機関、製薬メーカーの10人のスピーカーが登場し、それぞれの立場から抗毒素開発の現状や知見、問題点などを論じます。参加は無料ですが事前の参加登録が必要です。参加登録は10月14日（金）までに下記URLから。

<https://forms.gle/yKoUgMzxDruQhZVi8>